

## その他 (論文紹介)

### 高知学園大学・高知学園短期大学における「高等教育研究事始め」の記

近森 憲助<sup>1\*</sup>, 吉村 齊<sup>2</sup>, 生島 淳<sup>3</sup>

**要約**：高知学園大学及び高知学園短期大学における「高等教育研究事始め」として、「高等教育研究における遂行的手段としての社会的地図作成法 (Andreotti et al., 2016) (原文は英語；翻訳は筆者による)」を講読した。本稿では、この論文から「高等教育研究に関するどのような学びが得られたのか」及び「本学を、メタ的に捉える上で、今回得た学びは、どのような寄与を成すと期待されるか」について述べ、さらに、本学を研究対象とする高等教育研究の今後の取組みについて提案した。

**キーワード**：高等教育研究, 社会的地図作成法, 社会的イマジナリー, 言説的傾向

#### 1 はじめに

本稿では、筆頭著者である近森が高知学園大学・高知学園短期大学 (以下「本学」と呼ぶ) の学長に2020年4月に就任したことを契機に、吉村及び生島と共に始めた高等教育に関するささやかな共同研究の成果を紹介する。我々は「高等教育研究事始め」として、「高等教育研究における遂行的手段としての社会的地図作成法 (原文は英語；翻訳は筆者による)」と題する論文 (Andreotti et al., 2016a) を三人で講読することにした。

この論文を講読するきっかけは、講読した論文の著者の一人であるSteinが筆頭著者であり、Andreottiも総勢16名の執筆者の一人として名前を連ねている「脱植民地化 (Decolonization)」に関する論考 (Stein et al., 2020) に彼らの高等教育研究に関する論文が引用されていることに気づいたことにある<sup>1</sup>。折しも高等教育研究を始めたいと意気込んでいた時でもあったので、タイトルだけみて、後先考えずに飛びついた、ということに

なるであろう。

きっかけは、このようなものであったとして、では、なぜ、この論文を読もうと思ったのか。それは、本学を研究対象として「IR (Institutional research) をテーマとする令和3年度科研申請に向けて本論文で紹介されている社会的地図作成法の活用の可能性について検討したい」というのが、その理由であった。本稿では、論文の内容を紹介するとともに、社会的地図作成法の活用の可能性も含めて、「Andreottiらの論文から高等教育研究に関するどのような学びが得られたのか」、「本学を、今回得た学びを踏まえて、捉える上でどのような寄与を成すと期待されるか」これら二つの問いへの答えを示してみたい。ただ、後者の問いへの答えは、あくまでも仮説的なものであり、本格的な研究への足掛かりとなることを期待している。

<sup>1</sup>この論文は、ローズ大学 (南アフリカ共和国) のローバート・オドノヒュー名誉教授から教示を受けた。ここに記して謝意を表しておきたい。

<sup>1</sup>高知学園大学・高知学園短期大学学長 \*Email: kchikamori@kochi-gc.ac.jp

<sup>2</sup>高知学園大学健康科学部管理栄養学科

<sup>3</sup>高知学園短期大学看護学科

## 2 二つのイマジナリーと社会的地図作成法

この論文は「急速な社会的、政治的及び経済的变化に加えて、拡大を続けるグローバル化により特徴づけられる現状において、社会における高等教育の役割が見直しの対象となってきた」(本文84頁) (「 」は筆者らによる翻訳を示す：以下同様である) 状況の中で実施されたThe Ethical Internationalization in Higher Education (以下「EIHE」) プロジェクト (高等教育における倫理的国際化) という国際共同研究の成果を取りまとめたものである。「序論」「EIHEプロジェクト」「社会的地図作成法<sup>2</sup> (Social cartography)」「並列的な大学のイマジナリー」「市民的と企業的イマジナリーの間：言説的傾向」「国際化について<sup>3</sup>」及び「結論」と題した7つのセクションから構成されている。

ここで、私たちの学びについて述べる前に、読者の理解を助けるために、論文中で用いられている二つの用語、社会的イマジナリー及び近代的/植民地的グローバル・イマジナリーについて解説しておこう<sup>4</sup>。

まず、社会的イマジナリーについては、「Tayler (2002, p. 91) によれば、社会的イマジナリーとは『アイデアのセットではなく、むしろ意味づけを通して社会の実践を可能にするもの』である。社会的イマジナリーは、諸事物が何であり、どうあるべきかについての説明的で規範的な枠組みを与え、そして、その枠組みを通して規範や理想が意味を持つような状況の中で、道徳的あるいは形而上学的な秩序についてのある意識に立脚し、理想を認識することを可能とする。」と説明している (本文88頁)。本稿のテーマである高等教育研究に

引き寄せて考えれば、社会的イマジナリーは、大学等の高等教育機関を意味づけ、認識するために、それを通して眺めるために用いられる額縁のようなものということになる。

また、近代的/植民地的グローバル・イマジナリーは社会的イマジナリーの一つである。前者のイマジナリーは、論文中で「西洋/ヨーロッパという一つの地域的な見方を、想像上のグローバルデザインのための普遍的な設計図として西洋/ヨーロッパの支配、植民地主義、植民地的社会関係及び事業に導入しようとするものである (例えば、Mignolo, 2000; Quijano, 2000; Silva, 2007, 2013; Spivak, 1999; Tlostanova & Mignolo, 2012; Wynter, 2003)」。また、近代的/植民地的グローバル・イマジナリーの理論家や、これに関連する概念によって、このイマジナリーは、ヨーロッパのルネッサンス、さらに同時期に起こった植民地化プロジェクトと奴隷貿易に起源をもつことが示唆されている。その後の歴史の中で変化はしたものの、その形 (Andreottiらによる強調) は引き続き支配的である。それ故、代替的な諸イマジナリーはしばしば現れたが、理解できないあるいは不可能なものどちらかであったことから、このイマジナリーに挑戦するのは至難のことであろう」と述べられている (本文88頁)。現今の世界は、このような近代西洋の支配的で暴力的なグローバル・イマジナリーという額縁を通して眺め、認識することができる論文の著者らは主張しているのであり、それを、近代的/植民地的グローバル・イマジナリーと呼んでいるのである。

以上のイマジナリーに基づく大学の特性を明確に示すことは、大学の独創性や革新性が求められる現代において、大学改革の利害関係者が各大学の社会に対する役割と貢献への期待を分析する上で、意義のある情報を提供することができる。また、所属機関の傾向を分析して自大学の強みと弱みを適切に把握する上でも意義のある研究になると思われる。そこで、本研究を進めるためには、イマジナリーと各大学のミッション (私学の場合は建学の精神) や方針との関連性を把握すること

<sup>2</sup> 管見の限りでは、Social cartographyの定訳を見出すことができなかったため、ここでは「社会的地図作成法」としておいた。

<sup>3</sup> 原文では「Articulation of Internationalization」となっているが、辞書的には、Articulationは、発音、表現、説明など多義的で文脈に沿った適訳を見出すことができなかったため、ここでは、「国際化について」としておく。

<sup>4</sup> 社会的イマジナリー及び近代的/植民地的グローバル・イマジナリーに関しては、Stein & Andreotti (2016) においても詳細な議論がなされている。

が不可欠となる。その方法論として、大学等の高等教育機関を研究対象とする場合、それと同じレベルではなく、より高次のレベルから対象を俯瞰的に捉えるために必要とされるBarnett (2014, p. 9) が「高等教育についてのメタ思考」と呼んだものが不足していることから、ローランド・ポウルストンの社会的地図作成法が用いられている。社会的地図作成法については、「私たちの世界で展開している社会的変化をどう見るか、という点についてコミュニケーションを図るための可視的対話の方法として用いられる (Paulston 及び Liebman, 1996, p. 8)」という記述を紹介し、さらに「常識的なイマジナリーを問題化し、ありふれた言説を寄せ集めた際に認められる両面価値性、矛盾及び限界などを際立たせて、規範的あるいは標準的な主張が交差する領域に注目させる」と説明されている (本文84頁)。なお、この論文を講読する最大の理由であった社会的地図作成法については、自然科学の論文では、ごく当たり前であるが、データに即した記述は、ほとんどみられず、また、本文中に示されたいくつかの図に対応する記述もほとんど認められなかった。このようなことから、社会的地図作成法については、以下に示すような概論的な理解しか得ることができなかつた。ここでは、記述の順序としては前後するが、本文の86頁から87頁の社会的地図作成法に関する記述の抄訳を示しておきたい。

社会的地図作成法により作成される地図は、知的共同体内及び共同体間の違いを暫定的ではあるが、可視的に描出することができる道具となるものであって以下のような効用が期待できる、とされている。

①しばしば理論的、政治的、認識論的及び存在論的に暗示されているものを明示的なものとすることができる (Rust & Kenderes, 2011; Weidman & Jacob, 2011)。

②結果的に得られる地図は、問題やその問題への解答が、どのようにして、ある特定の社会的位置と見方の内部及びそれらの間の状況に埋め込まれているかを可視化する手助けとなる

(Paulston & Liebman, 1994, p. 215)。

筆者らの解釈するところによれば、①に示された効用は、地図作成を通して、それまで見えなかったもの、あるいは見えないとされていたものを見えるようにすることができること、また、②は、作成された社会的地図についての検討から得られた課題への解決策が、状況依存的であること、つまりどこでも、いつでも、どんな状況においても適用可能な普遍的に通用するようなものではないことを示している。

このことは、この作成法の提案者であるポウルストンが、「このアプローチの特性は、客観的な真理と実在を捉えると主張する近代主義的及び実証主義的なマッピングへのアプローチと対照的なものであることを強調した (Liebman & Paulston, as cited by Yamamoto & McClure, 2011)」ことにも通じる。このことから、「多くの質的研究法の場合がそうであるように、この方法により得られた成果は、一般化可能であることを意味しないが、様々な諸個人や共同体による多様な読み、議論及び再地図化へと開かれているものでもある。」

「Paulston (2009) によれば、この社会的地図作成法のプロセスに含まれているのは、マップ対象 (課題など)、その課題を実質的に扱っているテキストの範囲の選択、それぞれのテキストの位置及びそれらの交差の在り方、他のテキストとの重複等の見極め、そして最後にマッピングの対象となった共同体でのマップのテストによる調整などである」と説明されている。

また、その効用については、すでに上述の①及び②において概論的に述べられているが、ここではより具体的に、「このようなプロセスを経ることにより、現今の論議の輪郭と境界あるいは周縁が明らかになり、その境界を取り扱う論拠が与えられ、新たな研究だけではなく、その研究によって生まれた知がもたらす新たな地図作成への出発点を与える (Paulston & Liebman, 1994, p. 223)」とされている。

まさに、本学もまたAndreottiらが冒頭において述べているような状況の真っただ中にある。社

会的地図作成法は、このような状況の中で、本学に関する様々な言説を整理し、さらに、それらの言説間の両面価値性、矛盾及び限界などを際立たせることにより、よりの確に本学の現状を捉えるために有効に活用することができる方法論であろう。

いずれにしても、Andreottiらの論点は多岐にわたり、議論も入り組んでいる。そのうえ、この種の研究分野についての私たちの基本的理解が不足していることもあって、十全な理解に到達できたかどうかは極めて疑わしい。しかし、本稿においては、このような状況の中で、何とか読み取ることができたことを踏まえて、先に示した二つの問いについて、私たちの考えを示してみたい。

### 3. 論文からの学び

さて、最初の問いである、Andreottiらの論文を通して、私たちが得た学びについて述べてみたい。

最初の学びは、社会的イマジナリーとしての近代的/植民地的グローバル・イマジナリーという枠組みを通して、より高次の視点から、すなわちメタ的に大学等を眺めると、現在の高等教育機関は、「スコラ的」、「古典的」、「市民的」及び「企業的」なイマジナリーから捉えることができる、ということである。

ここで、これらの4つのイマジナリーについて、論文の記述（88頁から90頁）の翻訳をもとに、以下のように要約しておこう。なお、本文中では、4つのイマジナリーについての図が、図1として示されているが、ここでは割愛する。

①スコラ的イマジナリー（12世紀から16世紀）：（知的）職業人と聖職者の両者をトレーニングすることにより世俗の権力とローマカソリック教会の利益が結びついた。古代ギリシャの伝統だけではなくキリスト教の教義を導出した（Scott, 2006）。

②古典的イマジナリー（16世紀から19世紀）：このイマジナリーが注目するのは、国民国家が発生する中で、統治及びリーダーシップのための普遍的理性とエリートのトレーニングにある。

ここで強調されているのは、非宗教的な知とテクニカルなスキル、そして国家建設に寄与する人間主義的で科学的な知への関心である（Scott, 2006）。さらに、このイマジナリーは、植民化プロジェクトの一環としてヨーロッパからアメリカ大陸に輸出され、南米では16世紀に、北米では17世紀に大学が創設されている（Mignolo, 2003; Thelin, 2011）。

③市民的イマジナリー（19世紀中ごろから20世紀中ごろ/末）：このイマジナリーが注目するのは、国民国家の市民の教育であり、数多くの専門的労働者のトレーニングである。このイマジナリーの発生は、ヨーロッパ及びアメリカの戦後復興と冷戦時代の政治的及び思想的要請という状況の中で支配的なものとなった。しかし、その淵源は、19世紀中ごろの米国における最初のランドグラント大学<sup>5</sup>の創設にまで遡ることができる（Brown, 2003）。この市民的イマジナリーの意義は、高等教育を受ける機会の拡大と民主化や市民レベルの取組みの育成だけでなく、国家安全保障や経済発展に貢献するための研究や開発を支援するという強い使命を伴っている、ということである。

④企業的イマジナリー（1970年代から今日まで）：このイマジナリーは、1970年代に社会的サービスにおける国家の財政的役割の縮小に伴い最近現出したもので、社会的及び経済的起業家及び産学連携に注目する。市民的イマジナリーでは、知は、使用価値、つまり、人間のニーズに見合うある特定の生産物あるいはサービスの有用性により価値づけされたが、企業的イマジナリーでは、交換価値により価値づけされる。具体的には、生産物あるいはサービスが資本主義市場において他のものとの比較、つまり、その生産物あるいはサービスにどれだけ多くの人がお金を払うあるいは投資をするか、というこ

<sup>5</sup> 1862年に可決された第一次モリル法(First Morrill Act)に基づき設立され、農学、工学、軍事学を教育するために設立された大学群を指す（田島淳史、発表年不詳、1頁）。



とにより価値づけされるのである。このことから、研究、教育及びその他の大学の活動を「交換価値」で価値づけすることがむづかしくなった。それは、大学の教育・研究活動は、あらかじめ「経済的な価値が明らかな製品」をつくっているわけではないからである。資本主義的金融とその近代国民国家との関係はこのイマジナリーの普及を過去30年間に於いて推進してきたが、特に現在の経済危機が、それを加速した。次に、第2の言説的傾向を中心とする学びについて、これまでと同様に90頁から92頁の記述の翻訳をもとに述べてみたい。

先に述べた、これらの大学等の高等教育機関のイマジナリーが、現在においても並列的に存在し、大学などの高等教育機関の活動に影響を与えている、という。なかでも市民的及び企業的イマジナリーは、とくに現在の大学等において目立ったものとなっていて、Andreottiらは、これらのイマジナリーとの関連において、ネオリベラル、リベラル及びクリティカルな大学等の言説的傾向、さらには、これら三者間の4つの接触領域（ネオリベラルーリベラル、リベラルークリティカル、ネオリベラルークリティカル及びネオリベラルーリベラルークリティカル）について検討することで、大学等の在り方を具体的に特徴づけ捉えることができるとしている。

これらの言説的傾向及びそれらの接触領域について、彼らの主張について翻訳したものを以下に示しておこう。

ネオリベラルな言説的傾向は、大学の企業的イマジナリー、またアカデミック資本主義の実践を活発化させるために実施される公的分野の緊縮財政及び高等教育への国家予算の支出削減という政策的状況の中で、より見えやすいものとなっている（Barnett, 2013）。この傾向は、「人間の健康・福祉は強力な財産権、自由市場及び自由貿易を特徴とする制度的枠組み内における個人の起業家としての自由によって達成され得る」という見方（Harvey, 2005, p.2）を促している。したがって、知、研究、教授及びサービスを商品化するが、そ

の時には、大学の中核となる「ビジネス」は資格付与、専門家によるサービス及び商業的イノベーションという枠組みの中で捉えられることになる。学生は、指導者との相互交流における理性的なクライアント/顧客という枠組みの中で捉えられ、知の価値は、交換価値において評価される。この言説的傾向は、国際的なランキング<sup>6</sup>が成功の指標となる名声による経済活動の内での作動し、収入の創出とブランディングが組織の生き残りの基盤となる。この傾向においては、国民国家の役割は、必要であれば軍事力をも行使して、資本の権利及び市場が拡張し、円滑に機能できるようにし、また守ることである（本文90頁から91頁）。

このようなことから、わが国における大学等をめぐる状況、例えば毎年大学ランキングが発表される理由、外部資金導入への強い要請、起業家教育や大学が生み出す知を財として捉えることによる商品化の推進などは、ネオリベラルな言説的傾向に沿ったものであることが理解できよう。また、本学は、管理栄養士、臨床検査技師、保育士及び幼稚園教諭、歯科衛生士、看護師、保健師などの資格付与を目的とした教育・研究活動をおこなっているという点で、企業的イマジナリーのもとでネオリベラルな言説的傾向をもつ高等教育機関と位置付けられるのかもしれない。

リベラルな言説的傾向は、国民国家の民主的観念により説明できる大学の市民的イマジナリーの内にその起源がある。この傾向によって、大学等の高等教育機関は、公共善、市民的取り組み、議会制民主主義、平等、個人の自由、経済活動におけるケインズ主義<sup>7</sup>的傾向、そして福祉及び再分配における国家の強力な役割などに深く関わるよ

<sup>6</sup> なお、国際的な大学ランキングについては、Andreottiらの研究グループが興味深い論考を発表している（Shahjahan, Ramirez & Andreotti, 2017）。

<sup>7</sup> John Maynard Keynes (1883-1946)が主張した経済学は、「自由放任の経済にかわって、政府の経済への積極的介入を支持し、修正資本主義の理論的根拠を与えるとともに、租税による所得平等化政策と完全効用政策は、福祉国家を指向するものであった」と説明されている（中村達也：日本大百科全書（ニッポニカ））

うに促される。また、民主的権利、社会的健康・福祉への深い関与、そして経済的繁栄を調和させようと試みる様々な立場の範囲を表している。この傾向では、進歩、人間性の概念化及び将来ビジョンという唯一の理想に深く関わる国家の市民形成に固有の価値をもつものとして教育が捉えられる。また、研究は、国家の開発指数を改善する課題解決の形として捉えられる。さらに、公平性、包摂（インクルージョン）及び社会において周辺化されたアクターに、資格を与えるという形で、確立された組織/機関へのアクセスを促進するが、しかしながら、経済発展の物質的及び認識論的暴力（搾取、貧困及び奪取を通じた）と第三世界を生み出した、国際的な富と労働力の不平等な分配によって「第一世界」の持続可能性とのつながりは、しばしば除外されている、という（本文91頁）。

本学とリベラルな言説的傾向との関りでいえば、例えば「世界の平和と友愛」という建学の精神は、グローバルにもローカルにも公共善の形成を本学が目指していることの現れである。このことからすれば、本学は、市民的イマジナリーに根差すリベラルな言説的傾向をもった高等教育機関と位置付けることもできよう。

クリティカルな言説的傾向とは、権力と知の暴力的なパターンを妨げることを追求しようとする傾向である。そこでは、資本主義による搾取、一見慈悲深く、そして思考や行動の通常のパターンの中で作動している人種差別や植民地主義その他の抑圧の形態が強調される。このことは、大学の市民的イマジナリー内においても位置づけられているが、もっと多様な声の包摂やラディカルな形態の民主主義へのニーズが強調される。さらに、単一の、そして均一な国民国家について物語る（リベラルな傾向のように）というよりは、むしろクリティカルな傾向が目指しているのは、抑圧や権力、労働及び資源の不公平な分配のパターンを歴史的に、そして体系的に分析することにより、このような物語を変容させ、多元化し、あるいは置き換えることである。このようなことから、大学はエリート主義者の空間、象牙の塔とみなされが

ちであり、公共善との関連において大学の公的役割とその意志を強調しながら、周辺化された人々を強化し、それらの人々に発言権を与えることに向けての説明責任を求める傾向にある（本文91頁）。本学とクリティカルな言説的傾向との関連については今後の検討する必要がある。

以上のことから、図1に示したように、イマジナリーに関しては、本学は4つのすべてのイマジナリーから捉えることができる要素を有していると考えられる。なかでも企業的及び市民的イマジナリーの両者を強く併せ持つものとして、捉えられるのかもしれない。また、言説的傾向については、ネオリベラル及びリベラルな言説的傾向が強いのではないかと現段階では考えられる。

次に、これら3種の言説傾向の接触領域についての記述については、以下のように翻訳した。

ネオリベラルーリベラルの接触領域は、ネオリベラルが有する市民的プロセス及び意味を経済的に正当化するために用いられるなどのソフトスキルの市場への提供において人文科学の役割を擁護する。

リベラルークリティカルが接する領域は、不正義についてのより深い認識を示すが、個人（システムというよりはむしろ）の選択あるいは変容を踏まえた組織変化が唱道されている。

クリティカルーネオリベラルの接触領域は、経済的用語により枠組みを与えられる関心、すなわち、経済に共通善としての、あるいは、公正さや正義を促進するものとして「顧客」及び利害関係者（組織の投資及びリスクにより格付けされた）の資格の擁護としての、枠組みを与えるというクリティカルな戦略を用いる。また、第4の境界領域は、三つすべての言説的傾向をアピールする指示語が用いられる（本文92頁）。

なお、Adreottiらは、これまでの4つの接触領域についての議論を市民的及び企業的イマジナリーと関連させながら二つの図（91頁の図2及び92頁の図3）としてまとめて示している。しかし、図に示された指示語についての具体的な説明が本文中に見当たらず、図の意味するところを想像は

できるものの、必ずしも明確に読み取ることができない。そのために本稿にはこれらの図を示していない。

第3の国際化に関する学びについては、本文では92頁から95頁まで論述されているが、ここでは翻訳をもとにその内容を次のように要約しておきたい。まず、高等教育の国際化を、「知識社会のための国際化」「グローバルな公共善のための国際化」及び「反抑圧的国際化」として表現できる、ということである。これらは、それぞれの大学等の言説的傾向と密接にかかわっているが、いずれにしても近代的/植民地的グローバル・イマジナリーの枠内に収まっている、とされる。そうであるとはいえ、大学等は、民主主義、繁栄及び知識といった公共善を創り出すことに欠かすことのできない、そして善意に満ちた役割を演じている。しかし、さらに、国民国家の枠組みを脱却して、真にグローバルな公共善の創生、すなわち近代的/植民地的グローバル・イマジナリーの外部あるいは境界において、その創生に取り組むためには、「国際化」を「地域横断主義Trans-localism」に置き換えていく必要がある、とAndreottiらは提案している。この国際化に関しては、過去における本学の国際活動を掘り起こし、その内容を精査することを通して、どのように表現することが可能であるかを見極め、その成果にもとづいて、今後の国際化への方向を探る必要がある。

#### 4 本学を対象とする研究への学びの寄与と方向性

すでにセクション3において、本学の在り方について、論文からの学びを踏まえて考察を示した。しかし、これらの考察は暫定的なものであり、思いつきの域を出るものではない。今後の本学を研究対象とする高等教育研究の取組みは、現段階においては、以下のようなものであると考えている。

(1) 文部科学省の高等教育に関する教育の質保証等に関する政策文書を分析することにより、わが国の大学等の高等教育機関が、どのような社会的イマジナリーの枠組みの中で認識され、位置づけられようとしているのかを明らかにする。

(2) このような国家レベルの高等教育政策上で高等教育機関に関する認識あるいは位置づけと関連させながら、本学の学則、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アセスメント・ポリシー及びディプロマ・ポリシーなどを分析し、本学の機関レベルのイマジナリー及び言説的傾向を明らかにする。

高知学園大学・高知学園短期大学の場合、機関レベルにおける各種方針等と4つのイマジナリーとの関連として、例えば図1の相互作用が想定される。この各イマジナリーとその複合に基づき、高知学園短期大学では専門的職業人としての付加価値を支援し、地域医療へ貢献するため、「歯みがき指導」や「イキイキ健康フェア」を実施してきた。これらの活動を総合した健康教育の実績を高知学園大学においても活用し、地域医療への貢献度を高めることが求められる。そのためにも、各種方針とイマジナリーとの関連を具体化していく必要がある。なお図1は、本学の現在の在り方を暫定的に示す社会的地図とすることができるであろう。

(3) (2)の研究に際しては、本学がこれまで実施してきた教育・研究、地域及び国際貢献活動の実績、入学試験の方法、入学後の成績及び就職状況等、一連の学生に関する教学上のデータ、さらには教員の研究分野及び業績、さらにはそれらの教育内容との関連性など、入手可能なデータを駆使して、IRの手法を駆使しながら、本学の機関レベルのイマジナリーを生み出す内実を具体的に明らかにし、本学が一体どのような大学であるのかを明らかにする。

(4) 講読したAndreottiらの論文の冒頭にも示されているように、現在本学もまた、急速な社会的、政治的及び経済的变化に加えて、拡大を続けるグローバル化の中にあり、社会における高等教育の役割が見直しの対象となってきた。ローカルな課題として、入学者確保にとっては深刻な少子化にもさらされている。2020年9月15日開催の教授会において、当面向こう三年間における本学の取組みに関するプランが教職員に示された。

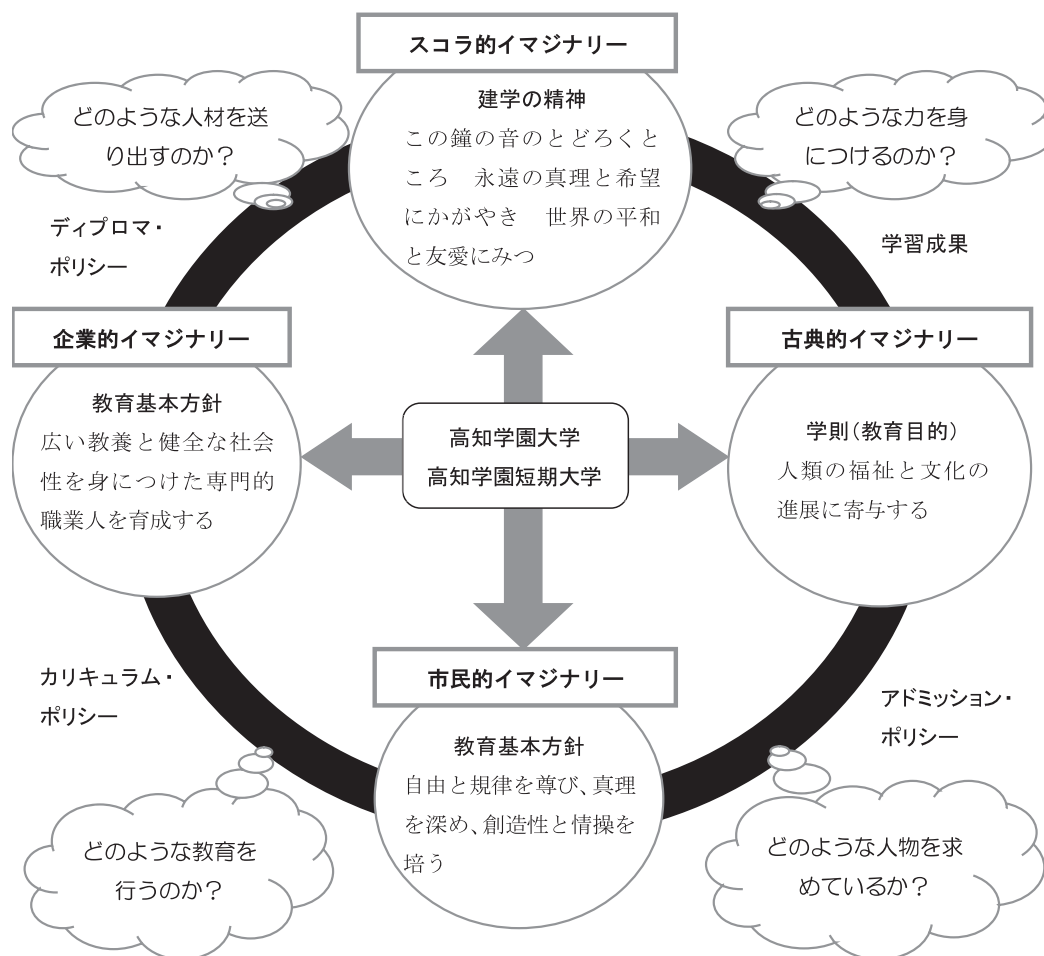


図1 高知学園大学および高知学園短期大学で想定される機関レベルの各種方針等と4つのイマジナリーとの関連

しかし、このプランは、今後(1)～(3)の研究を通して得た成果をもとに、さらに精緻化すると同時に実施に移していくべきものである。今後の研究の進展を期したい。

## 5 参考文献

### 5.1 講読した論文

Andreotti, V., Stein, S., Pashby, K., & Nicolson, M. (2016). Social cartographies as performative devices in research on higher education. *Higher Education Research & Development*, 35 (1): 84-99.

### 5.2 脚注に示した論文

Shahjahan, R. A., Ramirez, G. B., & Andreotti, V. (2017). Attempting to imagine the unimaginable: A decolonial reading of global university ranking. *Comparative Educational Review*, 61 (S1): S51-S73.

Stein, S., Andreotti, V., Suša, R., Amsler, S., Hunt, D., Ahenakew, C., Jimmy, E., Čajková, T., Valley, W., Cardoso, C., Siwek, D., Pitaguary, U., Pataxó, U., D'Emilica, D., Calhoun, B., & Okano, H. (2020). Gesturing toward decolonial futures: reflections on our learnings thus far. *Nordic Journal of Comparative and International Education*, 4 (1): 43-65.

Stein, S., & Andreotti, V. (2016). Higher Education



- and the Modern/Colonial Global Imaginary  
*Cultural Studies↔ Critical Methodologies* 17 (3):  
 1-9, DOI: 10.1177/1532708616672673. Retrieved  
 from [https://www.researchgate.net/publication/308907782\\_Higher\\_Education\\_and\\_the\\_Modern\\_Colonial\\_Global\\_Imaginary](https://www.researchgate.net/publication/308907782_Higher_Education_and_the_Modern_Colonial_Global_Imaginary) on September 12, 2020.
- 田島淳史（発表年不詳）「アメリカのLand Grant University（土地付と大学）における農業普及事業について（試論）」[www.nourin.tsukuba.ac.jp/2015.0504\\_04.Ag-Exprension.at.Land-Grant\(ver.1.4\).pdf](http://www.nourin.tsukuba.ac.jp/2015.0504_04.Ag-Exprension.at.Land-Grant(ver.1.4).pdf). 2020年9月21日参照
- ### 5.3 Andreottiらが引用した論文の中で、本稿において示した論文
- Barnett, R. (2013). *Imagining the university*. London: Routledge.
- Barnett, R. (2014). Thinking about higher education. In P. Gibbs & R. Barnett (Eds.). *Thinking about higher education* (pp. 9-22). London: Routledge.
- Brown, D.M. (2003). Hegemony and discourse of the land grant movement: Historicizing as a point of departure. *Journal of Advanced Composition*, 23 (2): 319-349.
- Harvey, D. (2005). *A brief history of neoliberalism*. Oxford: Oxford University Press.
- Mignolo, W. (2003). Globalization and the geopolitics of knowledge: The role of humanities in the corporate university. *Nepantla: Views from South*, 4 (1): 97-119.
- Mignolo, W. (2000). *Local histories/global designs: Coloniality, subaltern knowledges, and border thinking*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Paulston, R. G. (2009). Mapping comparative education after postmodernity. In R. Cowen & A.M. Kazamias (Eds.), *International handbook of comparative education* (pp. 965-990). Dordrecht: Springer.
- Paulston, R. G., & Liebman, M. (1996). Social cartography: A new metaphor/tool for comparative studies. In R.G. Paulston (Ed.), *Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change* (pp. 7-28). New York: Garland.
- Paulston, R. G., & Liebman, M. (1994). An invitation to postmodern social cartography. *Comparative Education Review*, 38 (2): 215-232.
- Quijano, A. (2000). *Coloniality of power., Eurocentrism, and Latin America. Nepantla*, 1 (3): 533-580.
- Rust, V.D., & Kenderes, A. (2011). Paulston and paradigms. In J.C. Weidman & W.J. Jacob (eds.), *Beyond the Comparative* (pp. 19-29). Rotterdam: Sense.
- Scott, J.C. (2006). The mission of the university: Medieval to postmodern transformations. *The Journal of Higher Education*, 77 (1): 1-39.
- Silva, D.F.D. (2007). *Toward a global idea of race*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Silva, D.F.D. (2013). To be announced: Radical praxis of knowing (at) the limit of justice. *Social Text*, 31 (1 114): 43-62.
- Spivak, G.C. (1999) *A critique of postcolonial reason*. Cambridge: Harvard University Press.
- Taylor, C. (2002). Modern social imaginaries. *Public Culture*, 14 (1): 91-124.
- Thelin, J. R. (2011). *A history of American higher education*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Tlostanova, M.V., & Mignolo, W. (2012). *Learning to unlearn. Decolonial reflections from Eurasia and the Americas*. Columbus: The Ohio State University Press.
- Wynter, S. (2003). Unsettling the coloniality of being/power/truth/freedom: Toward the human, after man, its overrepresentation-An argument. *CR: The New Centennial Review*, 3 (3): 257-337.
- Weidman, J.C., & Jacob, W.J. (2011). Mapping comparative, and development education. In J.

C. Weidman & W.J. Jacob (Eds.) *Beyond the comparative* (pp. 1-16). Rotterdam: Sense.

Yamamoto, Y., & McClure, M.W. (2011). How can social cartography help policy researchers? In J. C. Weidman & W.J. Jacob (Eds.) *Beyond the comparative: Advancing theory and its*

application to practice (pp. 153-170). Rotterdam: Sense.

受付日：令和2年10月15日

受理日：令和2年12月24日

---

**Others (Introduction of article)**

---

**The Narrative of Beginning of Higher Education Research  
in Kochi Gakuen University and Kochi Gakuen College**

Kensuke Chikamori<sup>1\*</sup>, Hitoshi Yoshimura<sup>2</sup> and Atsushi Shojima<sup>3</sup>

**Abstract:** We begin our higher education research in Kochi Gakuen University and Kochi Gakuen College with studying the paper by Andreotti et al. (2016) entitled as ‘Social cartographies as performative devices in research on higher education. In this paper, we discussed firstly ‘what we learnt from their paper in terms of higher education research’ and then secondly ‘what we can expect the contribution from what we learnt in our study to understand our university and college through meta-thinking.’ Finally, we proposed our provisional future efforts in higher education research on our university and college as its target.

**Key Words:** higher education research, social cartography, social imaginary, discursive orientation

---

<sup>1\*</sup> Kochi Gakuen University and Kochi Gakuen College, President, Email: kchikamori@kochi-gc.ac.jp

<sup>2</sup> Kochi Gakuen University, Faculty of Health Science, Department of Nutrition

<sup>3</sup> Kochi Gakuen College, Department of Nursing

